

林内景観の整備のしかたと考え方

岐阜県森林科学研究所

井川原弘一・横井秀一

研究の背景・ねらい

ストレスの多い現代社会において、森林浴によって心身のリラクセスを図るなど、森林の保健休養効果に寄せる期待が高まっています。しかし、必ずしも森林が人にとって快適な状態にあるとは限りません。森林浴の効果が十分に発揮されるためには、森林利用者が快適と感じる森林であることが望ましいと考えられます。

これまでの研究から、快適な森林の条件として、林内景観が好ましいことが重要であることがわかっています。そこで、保健休養林としてのニーズが高い里山を対象として、森林利用者が好ましいと感じる森林の姿（林分構造）を明らかにすることから、利用者にとって快適な林内景観をつくり出し、また、維持管理していくための技術開発を行いました。

成 果

保健休養林において森林内の雰囲気の良い悪いは、重要な問題です。森林利用者が林内の雰囲気の良い悪いを評価する基準は、森林タイプにより異なっていました（図1）。すべての森林タイプに共通した評価基準は、「快適かどうか」でした。

落葉広葉樹林では、ほかに「自然性が高いこと」、「親しみやすいこと」、「明るく開放的であること」、「過ごしやすい環境であること」が評価基準となっていました。落葉広葉樹林の樹冠の広がりと同じ直径の針葉樹と比べるとかなり大きくなるので、直径が同じくらいのときには、針葉樹林より落葉広葉樹林の立木密度は低くなります。したがって、上層木に積極的に手を入れる必要はないことと、それ以上に、視線の動きやすさを確保するために、下層木や林床植生をどう管理していくのが重要となります。

一方のスギ・ヒノキ人工林は、「林内が開放的であること」、「樹木は太く力強いこと」、「自然な感じのすること」、「神聖な感じがすること」が基準に評価されていました。スギ・ヒノキ林で景観的に好まれる林は、総じて、色合いが豊かな林であり、この色合いの豊かさは林床植生の量とほぼ比例します（写真1）。また、林内景観が好ましいためには「木が太いこと」、「見通しがよいこと」が重要となります。これらに影響をおよぼすのは立木密度です。したがって、スギ・ヒノキ人工林では、上層木の密度管理が重要となります。

針葉樹人工林、落葉広葉樹林、どちらの森林タイプでも、上層木の平均直径が小さい林は景観的には好まれない傾向がある（図2）ので、平均直径が20cm未満の林では景観整備による効果が少ないこと、また、整備する範囲は遊歩道から20m以内で景観的には十分であること（写真2）を提案しました。さらに、実際に景観整備を計画する際には、整備の目的にあった利用が見込める林なのかどうかを判断することが大切になります。

成果の活用

冊子「林内景観の整備のしかたと考え方」（写真3）を作成し、技術普及を図りました（当研究所のwebページ<http://www.cc.rd.pref.gifu.jp/shiyou/keikan.html>にて配付中）。県内外の行政機関、関連団体、NPO、ボランティア団体、コンサルタントなどから多くの問い合わせがありました。岐阜県では初めての森林景観整備に関する指針書であるため、県内の関連機関からの反響は特に大きいものがありました。平成16年度配付部数：464部



写真1

色合いの豊かさと林床植生の量（イメージ）

左：林床植生のない状態

右：高さ50cmの植生がある状態



写真2 整備対象範囲と距離（イメージ）

左：刈り払い距離5m、中：刈り払い距離10m、右：刈り払い距離20m

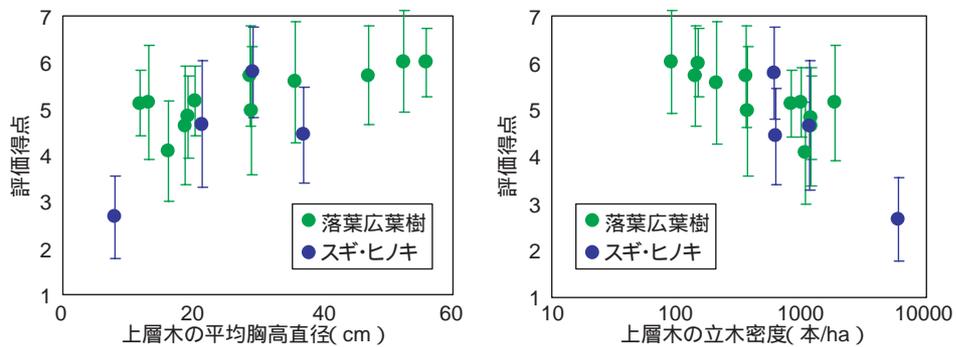


図2 「平均胸高直径、立木密度」と「林内景観の評価得点」の関係
評価得点は、好ましさ（1：嫌い、4：どちらでもない、7：好き）を示す



写真3 写真冊子「林内景観の整備のしかたと考え方」

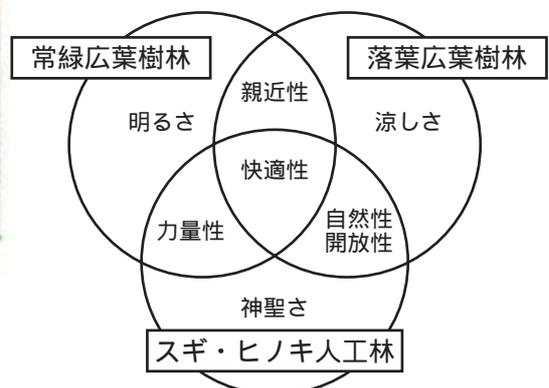


図1 林内の評価基準

[問い合わせ先：岐阜県森林科学研究所 森林環境部 TEL. 0575-33-2585]